

5月27日(日) 13:15~13:55 第二分科会:筑紫女学園大学スクワーヴァティーホール

---

**桑山玉洲の真景論再考**  
—「熊野奇勝図巻」を中心に—

学習院大学 大橋 美織  
OHASHI Miori

---

紀州の文人画家、桑山玉洲（1746～1799）は、特に画論『絵事鄙言』中の〈真景〉論で著名な画家であるが、玉洲個人の研究が急速に進展しつつある現在、今後は個々の作品に対する詳細な検討が必要とされるだろう。

そこで本発表では、玉洲の作品中、紀州徳川家に献上したことが唯一明確にわかる作品「熊野奇勝図巻」（個人蔵・一巻）を取り上げる。本図巻は、玉洲の〈真景〉図で重要な位置を占める作品にも拘らず、未だ基礎的な考察にとどまっている。そこで発表では、本図巻とその献上先である紀州藩十代藩主徳川治宝（はるとみ）の関係をキーワードに、本図巻を玉洲の〈真景〉論とその実践の諸相に位置づけながら考察を試みる。

本図巻は、寛政6年（1794）玉洲49歳の作であり、前年の熊野遊歴をもとに描いた奇勝五景と、紀州藩侍医・今井元方による序文・旅の道程や各景観の特徴を記した各図の解説からなる。

〈真景〉を描くことを提唱した玉洲の〈真景〉論については、酒井哲朗氏他の先行研究により、中国絵画の模倣に終わることのない、日本独自の絵画を確立するための論であつたことが指摘されている。その論とは、実景を描く際に形似のみを求めるのではなく、景自体の内包する「気韻」や「情」を体得し、その実景に相対した時に抱いた画家自身の情趣をも描出すべきということにあった。

その上で改めて本図巻を見てみると、独特的色彩感覚や広々とした空間表現により、玉洲の胸中の景を描き出している一方、実景へのこだわり、景観選択の配慮も見られる作品であることに気づく。発表者は、その背景に徳川治宝への意識が介在していると考える。

徳川治宝は文雅好み、交友範囲も豪商三井家をはじめ広きに亘った。その人的ネットワークも踏まえつつ、本発表ではまず本図巻の景観選択に関して、同時代史料を基に考察を進めたい。その際、本図巻が古来熊野参詣のメインルートであった中辺路（なかへち）ではなく、歴代の紀州藩主が通行した大辺路（おおへち）を描いた作品であることも考慮する。そして取材した実景においても、紀州徳川家ゆかりの地である「飛雪瀑布」をはじめ、治宝の知るべき熊野の現状、更には統治している紀州の景観を賛美することも意識した選択がなされていることに注目する。

さらには、本図巻を制作するにあたり、『紀伊続風土記』や『紀伊国名所図会』などの地誌に関与した治宝が、本図巻献上の約三ヶ月後に熊野を巡覧することを充分意識した可能性を踏まえ、それが元方の景観に対する詳細な解説とも対応する、玉洲の実景へのこだわりを感じさせる作画に繋がっていることを指摘する。

以上のことから、本発表では、本図巻が徳川治宝を意識し、かつ実景を重視しながらも、「風景に自らを遊ばせる」という文人画の理念に合致する玉洲〈真景〉図の着地点を示す作品として捉え得ることを明らかにする。